

# 「戦時世界」 3都が映す世界の今～ミュンヘン、デリー、東京 複合危機、国際協力回復を

2～3月、世界の要人や有識者らを集めた大型国際会議がミュンヘン（ドイツ）、ニューデリー（インド）、東京で相次いで開かれ、長期化するウクライナや中東ガザでの戦火の行方を議論した。3都の会議に映し出された「戦時世界」の現況と課題を報告する。（共同通信編集委員 川北省吾）

## ▽対立超え「創造」探る 日米欧の率先対処重要

2024年2月16～18日、ドイツ南部ミュンヘンで開催された「ミュンヘン安全保障会議」の基調テーマは「ルーズルーズ？」だった。「ウィンウィン」の対義語で「共倒れ」を意味する。

悲観的なテーマ設定の背景には、ロシアによるウクライナ侵攻の長期化がある。昨年6月に始まったウクライナの大規模反攻は失速し、終わりの見えない消耗戦への不安が欧州を覆う。

象徴的だったのが「（支援）疲れとの闘い」と題した討論会。ペロシ元米下院議長は「疲れてはならない」と力説したが、ウクライナ支援を含む米予算案が宙に浮く中で空回り感を残した。

「共倒れ」への不安は「グローバルサウス」の台頭と表裏を成す。中印など5カ国から、この1月に10カ国体制に拡大した「BRICS（ブリックス）」を中核とする新興・途上国だ。

「先進7カ国（G7）の国民はこれから10年の間に中国などグローバルサウスの主要国がさらに強くなるとみる一方、自国の停滞や衰退を予期している」。会議の年次報告はそう指摘した。

## ▽上げ潮ムードのグローバルサウス

2月21～23日、インドの首都ニューデリーで開催された「ライシナ対話」は、G7を中心とする北半球の先進諸国「グローバルノース」の不安と対照的に、上げ潮ムードにあふれていた。

インド外務省の協力の下、シンクタンク「オブザーバー研究財団」が主宰する。60年の歴史を誇るミュンヘン安保会議と比べ、2016年創設の新興ながら、世界中から3千人が集まった。

中国を抜き、人口世界一となったインドの勢いが見て取れる。9回目の今回は、世界の現況と課題を「対立、競争、協力、創造」の4語に集約し、それをそのまま基調テーマに据えた。

前面に打ち出されたのは「対立と競争」が広がる世界におけるインドの役割。ジャイシャンカル外相は北と南、西と東をつなぐ「橋渡し大国」との役割を担っていく姿勢を強調した。

「『パックス・アメリカーナ（米国の力による平和）』の命脈は尽き『パックス・シニカ（中国による平和）』も実現しない」（サミール・サラン同財団代表）との自




イスラエル軍に破壊されたパレスチナ自治区ガザの光景＝2月（ゲッティ＝共同）




言論NPOの工藤泰志代表

## — 3都の国際会議と焦点 —

 **ミュンヘン安全保障会議** [2月16～18日]  
**ドイツ** ▶ **ルーズルーズ（共倒れ）？**  
▶ ウクライナ消耗戦への不安  
▶ 西側の停滞や衰退への恐れ

 **ライシナ対話** [2月21～23日]  
**インド** ▶ **対立、競争、協力、創造**  
▶ 上げ潮のグローバルサウス反映  
▶ 「橋渡し大国インド」の役割強調

 **東京会議** [3月13～15日]  
**日本** ▶ **国際協力の回復**  
▶ 日本から発信する  
▶ 民主主義国の率先し行動が連帯示す

拡大する



イスラエル軍の攻撃で破壊された廃墟の中を歩く人々＝3月20日、パレスチナ自治区ガザ（ロイター＝共同）

信が底流にある。

両会議に参加し、先ごろ来日したカナダのシンクタンク「アジア太平洋財団」のピナ・ナジブラ副理事長も「ライシナはミュンヘンに比べ（未来への）明るさに満ちていた」と振り返った。

▽二極ではなく複雑な世界

2月28～29日には「東京グローバル・ダイアログ」（日本国際問題研究所主宰）、3月13～15日には「東京会議2024」（言論NPO主宰）がそれぞれ東京都内で開催された。

このうち、10カ国の著名シンクタンク代表が参加した東京会議は「多極化、分断化する世界における国際協力の回復」を基調テーマに掲げ「日本から発信する」（工藤泰志・言論NPO代表）ことにこだわった。

議論をまとめた工藤氏の「議長メッセージ」を今年のG7議長国イタリアに提出。「（戦争や気候変動など）複合危機に民主主義国が率先して取り組むことが、世界との連帯を示すことになる」と呼びかけた。

米国際政治学者イアン・ブレマー氏は「われわれが向かっているのは『西側VSGグローバルサウス』『民主主義V S 権威主義』といった二極ではなく、はるかに複雑な世界だ」と取材に語る。

そんな中で、地政学的な「対立と競争」だけに目を向けていると、世界の分断は深まるばかりだ。危機の時代だからこそ、未来を見据えた「協力と創造」の方途を探る営為が求められる。

▽「インタビュー」希望の持てる未来をつくる 行動するシンクタンクへ 工藤泰志・言論NPO代表

—今年の東京会議は「国際協力の回復」をテーマに掲げました。

「私たちはウクライナと中東ガザで、二つの戦争と向き合っている。戦乱に伴って食料や資源価格が高騰し、気候危機も常態化している」

「だが、問題は危機そのものではない。複合危機に直面し、協力しなければならぬときに、世界が協力していないことが最大の問題だ」

「その背景として、米中の地政学的な対立に加え、『グローバルサウス』と呼ばれる新興・途上国の不信感が強まっている側面がある」

「自分たちが決定権を持たない中で生存が左右される現状に、彼らはいら立っている。欧米中心の秩序では未来が描けないと思い始めた」

「こうした状況に民主主義国が本気で取り組まなければ世界の亀裂が広がり、課題解決に落后してしまう。これこそが本当の危機だ」

—議論を総括した「議長メッセージ」にも危機感が表れています。

「法の支配の立て直しを強調した。（ある国の国際法違反に厳しく、別の国には甘い）使い分けを認めれば、法の支配への信頼は失われる」



ロシアのミサイル攻撃で損壊したウクライナ首都キーウの集合住宅 = 1月（ロイター=共同）



ウクライナと国境を接する西部地域から発砲するロシア軍の戦車 = 3月19日（ロシア国防省提供、タス=共同）



ウクライナのゼレンスキー大統領 = 2月17日（ゲッティ=共同）



ミュンヘン安全保障会議で発言するペロシ元米下院議長 = 2月17日（ゲッティ=共同）

「しかし、日米欧などがこれらに率先して取り組めば、グローバルサウスも『もう一度、民主国家と話してみたい』と考えてくれるはずだ」

「議論を重ねて『シンク（考える）タンク』から『ドウ（行動する）タンク』へ脱皮し、課題解決へ自ら責任を果たす流れをつくりたい」

「多くの人々が幸せになり、希望の持てる未来をつくることはシンクタンクの責任。東京会議はそのための舞台だ。今後もやり遂げる」

× ×

くどう・やすし 1958年、青森市出身。出版社編集者を経て2001年に非営利民間シンクタンク「言論NPO」を創設し、代表に。

「言葉解説」3都の国際会議

ミュンヘン安全保障会議は冷戦下の1960年代、西ドイツで発足した老舗フォーラム。例年2月に年次会合を開き、今回で60周年。議長はメルケル前ドイツ首相の外交・安全保障政策首席補佐官だったホイスゲン元国連大使。ライシナ対話は2016年に始まり、インドの台頭に伴って存在感を拡大。2024年3月に初の東京会合（ライシナ東京）を開いた。東京会議は2017年に日本の民間シンクタンク「言論NPO」が立ち上げた。日米欧やインドなど世界の民主主義10カ国の著名シンクタンク代表が出席している。



初めて開催された「ライシナ対話」の東京会合で講演するインドのジャイシャンカル外相＝3月7日、東京都港区

拡大する